

第一分科会報告書

桐生ユネスコ協会 高柳 光雄

今ユネスコといえば「世界遺産」である。しかも昨年六月に富岡製糸場が晴れて世界遺産に登録されブームに沸いているなかで開かれた第一分科会のテーマは「世界遺産・地域遺産」ということで、地元富岡ユ協が「世界遺産のある街として」、また水戸ユ協が「地域のたからものを次世代につなぐために」と地域遺産活動について発表が行われた。注目を集めたテーマの為か第一分科会には一都五県四十五ユ協から八十数名の会員が集い熱心な討議が行われた。桜場紀久子氏と青年部の大学生とによる水戸ユ協の発表は「ユネスコ精神の理解推進」を大きな共通のテーマとして水戸ユ協が行ってきた様々な活動のうち、水戸ユネスコ祭りでは、日本の伝統的な食文化である「和食」について学び、小学生を対象に行った「地域遺産めぐり」では青年部の大学生たちが自分たちで企画・運営をするこ

とで自ら学び、気づきを得ていたと報告がなされた。

一方地元富岡ユ協の発表は矢野英司氏が行った。三十年ほど前から行われてきた富岡製糸場を国の重要文化財や国宝にしようという市民運動とは別に、ユネスコとして富岡製糸場の素晴らしさを知ってもらおうには何が出来るかを考え、「ユネスコ世界遺産こども伝導師団」を約十年ほど前に組織し、世界遺産登録の気運を高め、市民の理解を図る為の事業を

行ってきた。また世界遺産登録が具体化してきた一昨年には学校の児童生徒を対象にした「夏休みユネスコスタディツアー」を実施し、絹産業遺産群を構成する富岡製糸場、荒船風穴、高山社を回り各遺産の歴史やそれぞれの役割を学び、理解を深めた等の発表がなされた。それぞれの発表の後、活発な質疑になり、柏ユ協の会員から「世界遺産の周りには NPO や NGO といったさまざまな組織や団体があるが民間ユネスコだから出来ることは何か」と質問があり、富岡ユ協の高橋会長から「富岡ユ協としては大人を対象とした啓発運動や街づくり運動は他の団体にまかせて、あくまでもユネスコ精神を基本として、世界遺産を未来へ守り続けるという活動を青少年を中心に行っていきたい。」との説明が印象に残った。

また、水戸ユ協の発表に対しては各地の会員から自分たちの活動事例の紹介や、事業を行う際の参加者を集める難しさ等の話題が出て各地のユ協で同じような悩みがあることが理解できた。最後にコーディネーターの北川氏より、「ユネスコの世界遺産はユネスコ精神を普及する為の拠点施設であり、経済効果を期待したり、観光施設でもなくユネスコの平和の理念を次代に引き継いでいく施設であるという認識をもっている。」とのまとめがあり、有意義な分科会が終了した。



第二分科会

高崎ユネスコ協会 上田 一美

今回の関プロ大会は、これまでと違い一日だけの開催で、正味時間が短縮されたものだった。しかし、分科会に使える時間は従来通りに、またはそれ以上に確保されていて、運営集団の分科会研究への強い思いを感じた。

私は、今年は記録係として分科会に参加したので、今までに比べて一層真剣に聞いたり考えたりできたかと思っている。

第二分科会のテーマは「ESD・ユネスコスクール」である。

最初の提案者・前橋六中の生徒会役員の方々は、地域社会を繋ぐ持続可能なユネスコ活動について発表してくれた。ESD加盟の前と後とは、生徒の意識が変わったという。これらの活動がユネスコ活動に繋がっているという意識を全校生徒に持つてもらうために、さらに工夫改善をしていきたい、それにはESDパスポートの活用はどうなのだろうか、という提案を含めて締められた。

次の提案者・新島学園高等学校の生徒会長さんは、学校の教育五原則、己を愛し隣人を愛することから生まれるボランティア活動・環境活動・グローバル教育について発表してくれた。環境活動の一環で農園を運営しながら、またペットボ

トルキャップの回収をしながら、環境問題との関連と矛盾を考えると、無農薬・低肥料でも立派な野菜を作りたい、キャップ回収で生じる多くの時間と輸送資源の消費というデメリットを解消したい、どうすればよいのだろうか等である。会場の全員に投げかけられた問題だ。出席者は熟慮して、何かコメントをしなくてはならないだろう。

最後は、ESDに関して最先進県である千葉ユネスコ協会・岡本氏の発表だ。その歴史を五期に分けて詳しく説明して下さった。

本研究大会の準備段階で、分科会担当の岸部長は、「今年の分科会別研修は、研究成果等の発表の場ではなく、活動を通じての提案型研修の場にした。」と力説された。第二分科会では休憩時間も取らずに、熱心に話し合いや体験紹介・質疑応答が続いた。一参加者としての感想ではあるが、各自が持ち帰ったものの質と量から、前掲の岸部長のねらいはある程度達成できたのではないかと

思っている。